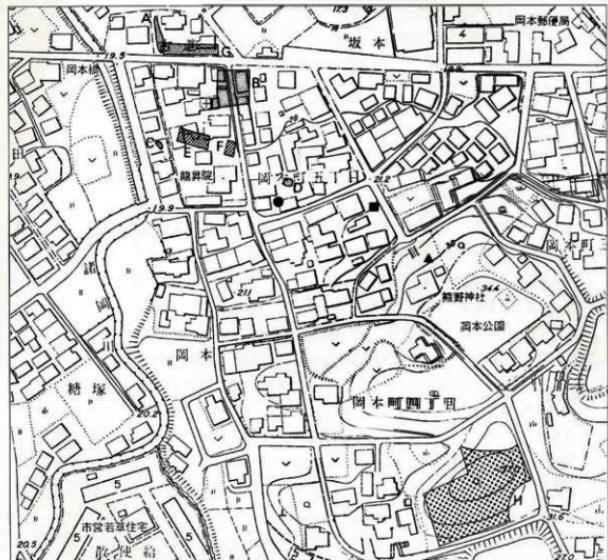


須玖・岡本遺跡

福岡県春日市岡本町所在遺跡の調査概要

1980

福岡県教育委員会



A・B・C・D (昭和4年、京都帝國大学発掘調査地点) E・F (昭和37年、九州大学・福岡県教育委員会発掘調査地点)

G (昭和54年、福岡県教育委員会発掘調査地点)

H (昭和54年、春日市教育委員会発掘調査地点)

● 本来の支石墓所在地

■ 支石墓所在地(京都帝國大学発掘当時)

▲ 支石墓現所在地

第1図 遺跡周辺地形図(昭和54年現在)

序

本報告書は、県道大野・二丈線の拡幅工事にともない、昭和54年4月に実施した埋蔵文化財発掘調査の記録であります。春日市は新田の中心地に位置されておりまして、原始・古代の歴史を解説するうえにも重要な所であります。

ここに調査の成果をまとめ、報告書の刊行に至った次第であります。

本報告書の刊行にあたり文化財への关心が深められ、活用されますことを願ってやみません。

昭和54年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 浦山太郎

例　　言

1. 本報告書は、福岡県教育委員会が県道大野・二丈線の拡幅工事に伴い、県道路建設課から執行委託を受けて昭和54年4月2日～4月12日にかけて実施した須玖・岡本遺跡の緊急発掘調査の概要である。
2. 本書に掲載した図・造構写真は、宮小路賀宏・木下修・佐々木隆彦・草場敬一があたり、製図は佐々木・平田春美が分担した。造物写真は、九州歴史資料館の石丸洋、平島美代子氏、整理は岩瀬正信氏にお願いした。
3. 本書の執筆は、IIを宮小路がその他は佐々木が分担し、編集は佐々木が担当した。

本文目次

| | |
|-------------|---|
| I. 遺跡の位置と環境 | 2 |
| II. 調査に至る経過 | 3 |
| III. 調査の概要 | 3 |
| IV. 造様と造物 | 5 |
| V. おわりに | 6 |

I. 遺跡の位置と環境

本遺跡は觀音山から派生する春日丘陵の北端に位置し、福岡県春日市岡本町739-1番地に所在する。当丘陵は、弥生時代の遺跡群が密集する丘陵として著名な所である。丘陵の東側裾部には、御笠川に合流する諸岡川が南北に蛇行しながら静流する。

当該地は、古くは明治32年に支石墓が発見され、前漢鏡30枚面・細形銅劍・銅才・銅矛・ガラス盤・勾玉・管玉等が出土した須玖・岡本遺跡の一群で、支石墓所在地から110米北側の丘陵の突端に所在する。当遺跡一帯は、弥生時代の墓地群、とりわけ大規模豪富墓群として早くから知られており、昭和4年に初めて京都大学による学術的なメスが入れられ、続いて昭和37(註1)

年には九州大学・福岡県教育委員会の合同調査が実施され多大の成果を挙めた遺跡である。

さらに、当地点は京都大学発掘A地点と称される箇所と一部重複し、調査のトレンチを確認するに至った。

注1 京都帝國大学文学部考古学研究報告 第11卷「筑前須玖史前道路の研究」—1929年

注2 福岡県教育委員会「福岡県須玖・岡本遺跡調査概報」—1963年

II. 調査に至る経過

須玖・岡本遺跡の所在する丘陵の北端を東西に通過する県道（大野・二丈線）は、近年とみに交通量が増大し、これの拡幅が必要となった。道路は、北側に幅6mを拡幅する計画となり、これの予備調査は春日市教育委員会で実施され、丸山康晴・平田定幸が調査に当たった。昭和54年3月19・20日の予備調査によって、昭和4年に京都帝國大学が実施した発掘調査のA地点の確認と、その東側において斐棺墓群を確認した。調査を必要とする範囲は、幅6m×15mの小面積であるが、当該調査対象地区の北側にも遺跡は拡大するものと考えられる。なお、南側はさきの京都帝國大学が実施した調査のB地点であり、10基の斐棺墓が発見されている。

今回の発掘調査の経緯となるものが、県道拡幅工事であることから、急換発掘調査も県事業に切り替え、昭和54年4月2日から12日までの10日間で調査を実施した。

調査は、福岡県教育委員会が主催し、文化課が担当した。現地調査には調査第一係長宮路賀宏と技師佐々木隆彦を派遣し、庶務係主任主事大神新が経理を担当した。

なお、調査には春日市教育委員会社会教育課の協力を受けるとともに、山口大学文学部近藤一助教授の助言を得た。当該遺跡の調査は今回で3次目である。弥生時代の極めて重要な遺跡であるがその一部が明らかになったにすぎない。今後とも注意深く道路の全容を究明する必要がある。

III. 調査の概要

調査は新規に拡幅する部分から着手し、ほぼ90m²を対象とした。追構検出の結果、13基の斐棺墓を検出した。内訳は成人棺墓10基、小児棺墓3基である。発掘地点は、旧地形図で見る限りでは、本来の丘陵幅が60m近くあり現在では2/3近くが削平を受けている。13基の斐棺墓は殆んど丘陵尾根線付近に集中して埋葬されており、斐棺の主軸は尾根線に対して平行乃至直行している。さらに当該地は著しく削平されており、小児棺の遺存状態が頗る悪いことから、小児棺の总数は増加すると思われる。個別斐棺墓では1号斐棺墓が一群から離れて埋葬され、墓壙規模も大きく深い。7号と8号は斐棺を埋置する穴を掘削した際に墓壙の床面を灰白色の粘土で穴の斜面にはほぼ平行になるように埋土している。これが何を意味するかは明らかでない。さらに、8号は竪穴を掘り斐棺を傾斜させているが横穴を掘っておらず、これに後出する斐棺墓の遺憾的形態であろう。

また、調査区は住宅地であることから斐棺墓は全体的に擾乱が著しく、棺内の遺物は皆無である。

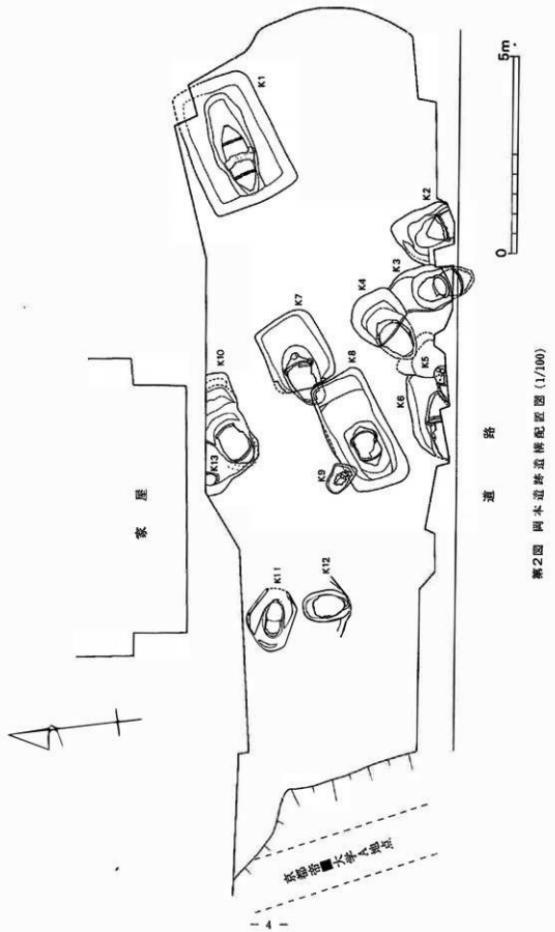


圖2 圖本道路配置圖 (1/100)

IV. 遺構と遺物

| AS | 基礎規格 | 基礎形態 | 傾斜角度 | 合口形式 | 器種 | 主軸方位 | 時期 | 備考 | 要観察 |
|----|--------------------|-------|------|------|------|--------|------|---|---------------------------|
| 1 | 長軸×短軸 3.39×2.31 | 長方形 | -5° | 接口式 | 甕+甌 | N74° E | 中期前葉 | 二段式の甕、甌は2段式。内側は素面、外側は粗面。甌は内側に2段式。内側は素面、外側は粗面。甌は内側に2段式。内側は素面、外側は粗面。甌は内側に2段式。内側は素面、外側は粗面。 | 中期後葉から後葉まである。内側は素面、外側は粗面。 |
| 2 | 不明 | 不明 | 不明 | 接口式 | 鉢+甌 | N21° W | 中期前葉 | 3号に認められた甌と同様の形態。 | 中期後葉から後葉まである。内側は素面、外側は粗面。 |
| 3 | -×1.15 | 不整長方形 | +36° | 接口式 | 甕+甌 | N17° W | 中期後半 | 上部は円筒形である。下部は切妻形である。内側は素面、外側は粗面。 | 中期後葉から後葉まである。内側は素面、外側は粗面。 |
| 4 | 1.25×1.36 | 不整方形 | +26° | 接口式 | 丹井×甌 | N44° E | 中期後半 | 上部は円筒形である。下部は切妻形である。内側は素面、外側は粗面。 | 中期後葉から後葉まである。内側は素面、外側は粗面。 |
| 5 | 不明 | 不整形 | 不明 | 接口式 | 甕+甌 | N62° E | 中期後半 | 平底。4号に認められた甌と同様の形態。 | 中期後葉から後葉まである。内側は素面、外側は粗面。 |
| 6 | 不明 | 隅丸長方形 | -6° | 接口式 | 甕+甌 | N87° E | 中期前葉 | 上部は円筒形である。下部は切妻形である。内側は素面、外側は粗面。 | 中期後葉から後葉まである。内側は素面、外側は粗面。 |
| 7 | 1.95×1.63 | 隅丸長方形 | +25° | 接口式 | 鉢+甌 | N74° E | 中期中葉 | 縦横の両端を丸めた長方形である。内側は素面、外側は粗面。 | 中期後葉から後葉まである。内側は素面、外側は粗面。 |
| 8 | 3.05×1.53 | 隅丸長方形 | +40° | 接口式 | 鉢+甌 | N71° E | 中期中葉 | 二段式の甕、甌は2段式。内側は素面、外側は粗面。甌は内側に2段式。内側は素面、外側は粗面。甌は内側に2段式。内側は素面、外側は粗面。甌は内側に2段式。内側は素面、外側は粗面。 | 中期後葉から後葉まである。内側は素面、外側は粗面。 |
| 9 | 0.85×0.50 | 不整形 | 不明 | 不明 | 不明 | N33° W | 不明 | 甌は2段式。 | 中期後葉から後葉まである。内側は素面、外側は粗面。 |
| 10 | 不明 | 桔円形 | +26° | - | 单 瓶 | N54° E | 中期後半 | 平底。 | 中期後葉から後葉まである。内側は素面、外側は粗面。 |
| 11 | 1.60×1.20 | 不整桔円形 | +26° | 鉢入式 | 丹井+甌 | N78° W | 後期初期 | 一輪丸、三輪、内側は素面、外側は粗面。 | 中期後葉から後葉まである。内側は素面、外側は粗面。 |
| 12 | 不明 | 不明 | +25° | 不明 | 甕+甌 | N40° W | 中期末 | 甌底が深い。上部は丸い形である。内側は素面、外側は粗面。 | 中期後葉から後葉まである。内側は素面、外側は粗面。 |
| 13 | - | - | - | - | - | - | - | 小形の甌である。 | 中期後葉から後葉まである。内側は素面、外側は粗面。 |

V. おわりに

須玖・岡本遺跡は、明治末期から大正初期にかけて、八木斐三郎・中山平次郎・浜田耕作諸博士によって踏査がなされ、ついで昭和4年に森本六賀によって踏査と若干の発掘調査が行われている。同年9月には京都帝国大学の本格的な学術調査が実施され、総数11基の寝棺墓が検出された。新しくは昭和37年10月に県事業として調査が行なわれ、19基の寝棺墓と3基の土壙墓^(註1)が確認されている。前者の調査では細形鋼劍1、後者では細形鋼劍、細形鋼戈各1が出土している。今度の発掘地点は、明治35年に道路改修工事で掘削された道路を挟んで京都帝国大学が調査したB地点の北側に位置しており、調査の成果が期待された。結果は13基の寝棺墓を検出したが、古い時期のもので中期前業（横口氏の福年によるKII式^(註2)）、新しい時期では後期初頭（同KVa式^(註3)）のものが認められた。昭和37年の調査によると15号寝棺墓の墓壙規模は他と比較して一段と大きく細形鋼劍を副葬しており、後出する時期の13号・14号寝棺墓と3号土壙墓と一連の時期の墓に副葬品が見受けられ、一定の場所に集中して出土することは、中核をなす血縁的な墓壙として設定されたことを窺わせる。今度の発掘地点では、狭い調査区域であるとともにさることながら、支石墓に近い場所は優位な場所、から離れた墓壙の北限であることから、副葬品を伴う一群の墓域として設定されないグループであることが考慮される。

さらに発掘区西隅で京都帝国大学発掘調査A地点に相当すると思われる箇所を確認した。京都帝国大学の調査によると、「台地の広さ東西約四十間南北約十五間。…西側は徐々に平夷せられて稍々広い畑地をなし、約四尺の低い切り取りを作っている。而かも我々は此の断層線の中央から少し南方に方る一地点に於いて、特に多数の土器が地表下三尺乃至五尺前後の所に存在する」とあり、丹塗り土器が多数出土していることから、寝棺墓の周辺には祭祀に関する遺構の存在を窺わせる資料である。さらに、昭和54年に春日市教委による岡本4丁目の寝棺墓の調査がなされ、多数の寝棺墓が確認されており、小型銅鐸の鉄型を出土したことで脚光を浴びた遺跡であるが、支石墓を中核とする墓地群とは異った一群を形成しているものであろう。^(註4)

現在では須玖・岡本遺跡周辺は、福岡都市圏のベットタウンとして家庭建設が著しく、遺跡の面影は失われつつあり、僅の空間を残しつつも遺跡全体の把握がなされていない現状では、文化財保護行政の立場から、さらには重要遺跡の管理策定の面からも早急な対策を講じる必要があろう。

註1 京都帝国大学文学部考古学研究報告第11号「筑前須玖史前遺跡の研究」-1929年

註2 福岡県教育委員会「須玖岡本遺跡調査概報」-1963年

註3 福岡県教育委員会「九州紀賀自動車道関係埋蔵文化財調査報告(XXXI)中巻」-1979年

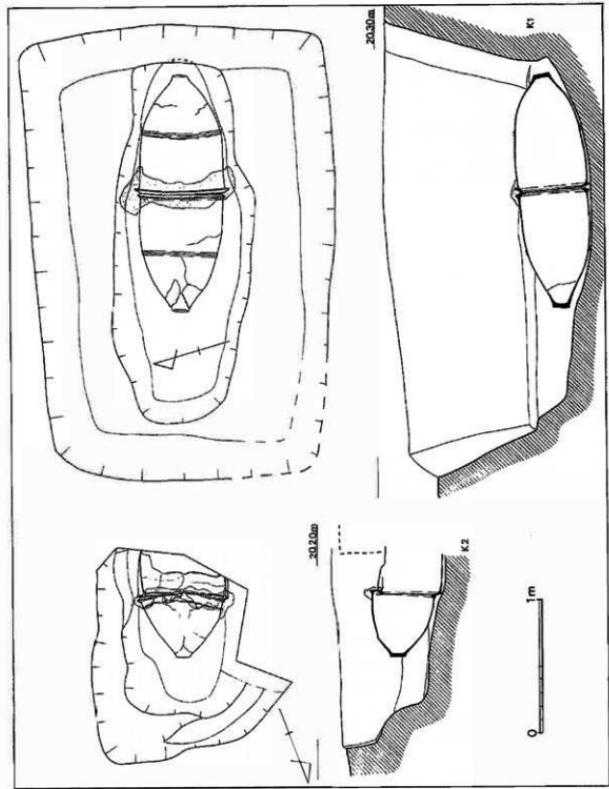
註4 註3と同じ、13号から細形鋼劍1、14号からガラス小玉38個、15号から細形鋼劍1、3号土壙墓

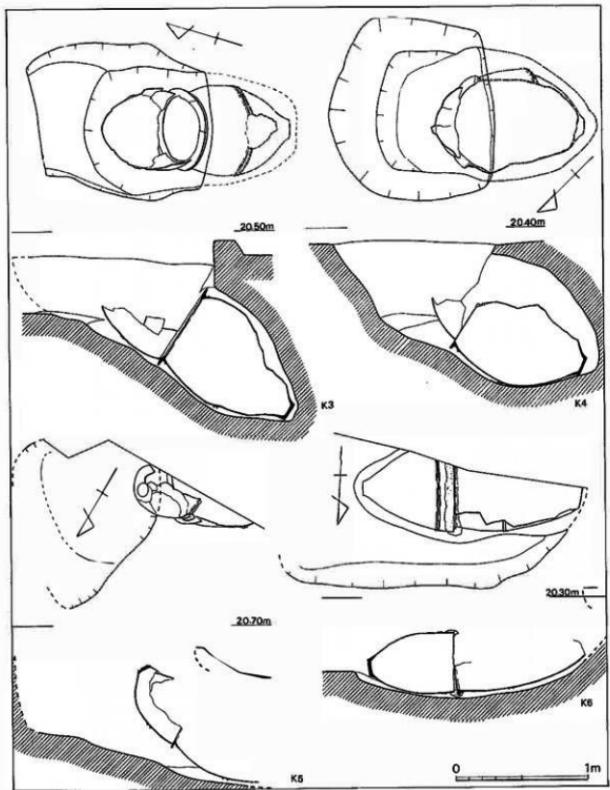
からは鉄刀、銅鏡3、ガラス勾玉1が出土している。

註5 註3と同じ。

註6 考古学発掘二編「小銅鐸の鉄型と石鍛工場跡(九州)」アサヒグラフ1979,7-13

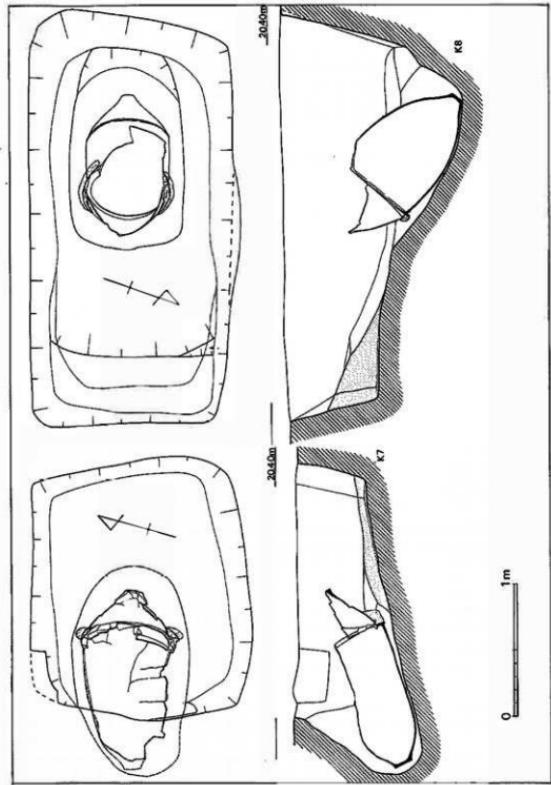
第3図 1号・2号炭坑基質測面図 (1/30)

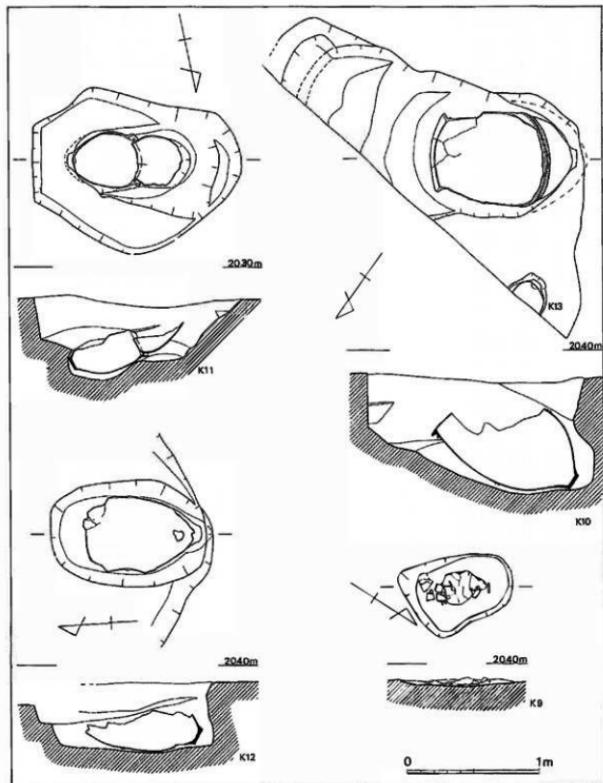




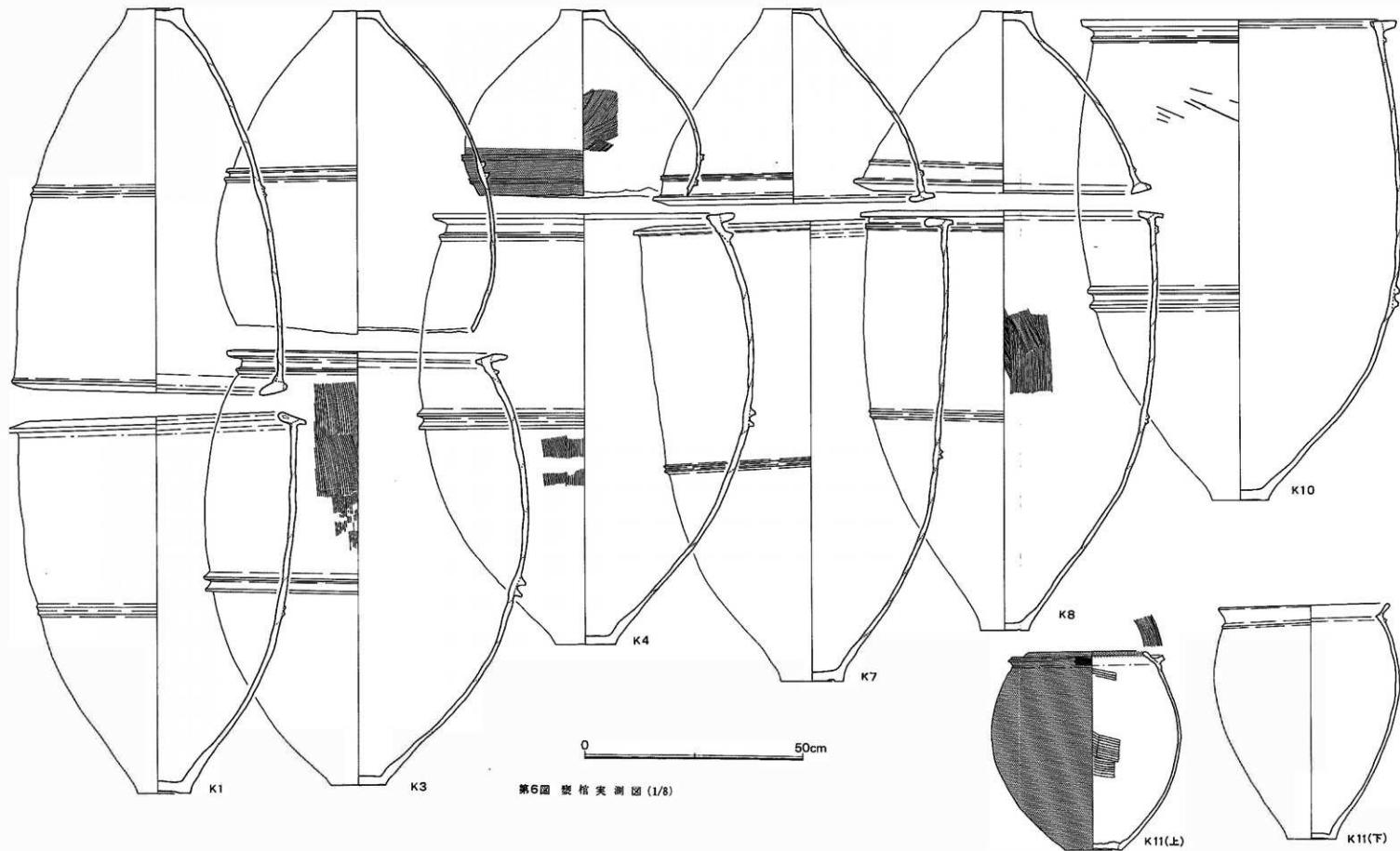
第4図 3号・4号・5号・6号棗棺墓実測図(1/30)

圖5圖 7號・8號棺墓剖面圖 (1/30)

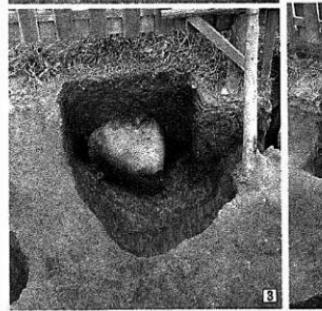
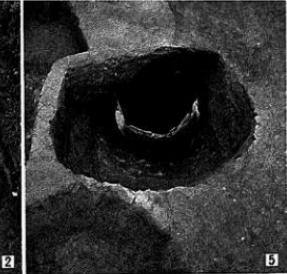


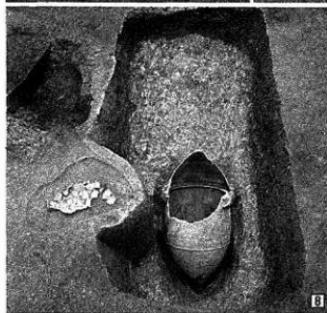
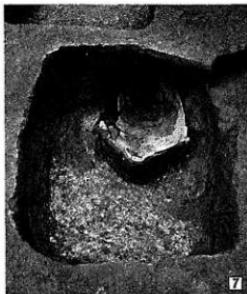


第6図 9号・10号・11号・12号・13号棊石実測図 (1/30)

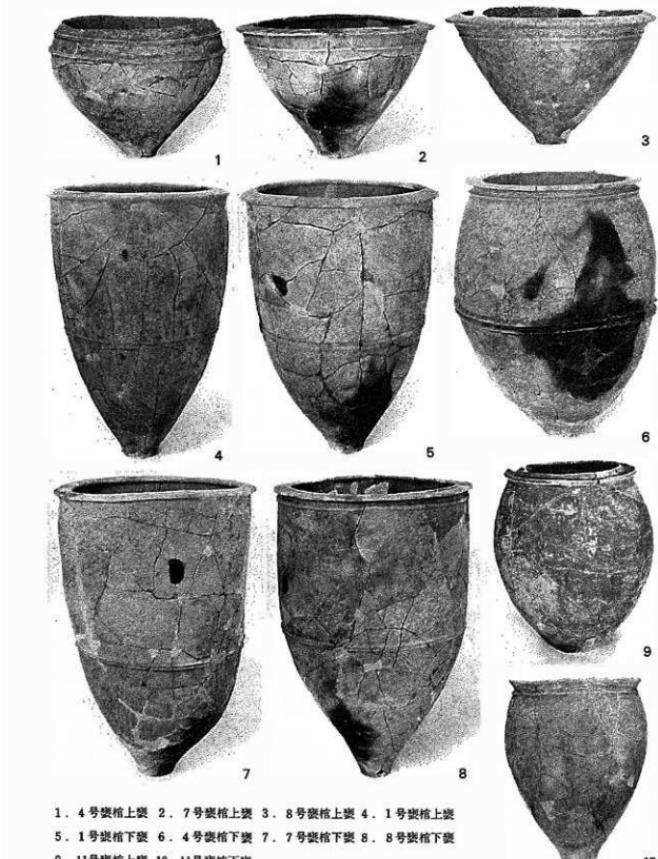


第6図 櫻棺実測図(1/8)



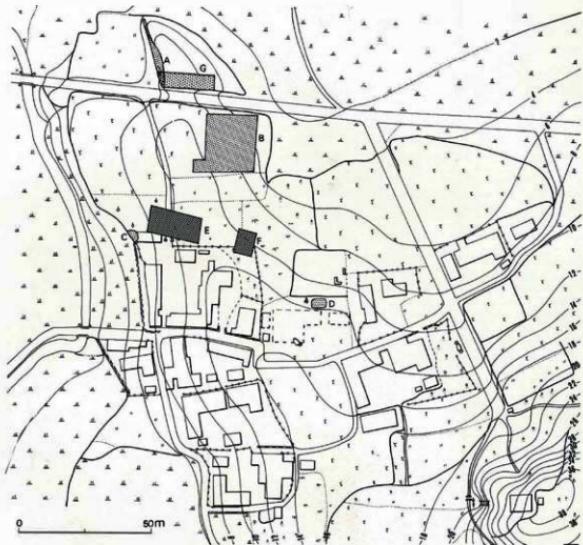


1. 遺跡金環(西から)
2. 1号槨棺蓋(南から)
3. 2号槨棺蓋(北から)
4. 3号槨棺蓋(北から)
5. 4号槨棺蓋(東から)
6. 5号・6号槨棺蓋(北から)
7. 7号槨棺蓋(東から)
8. 8号・9号槨棺蓋(西から)
9. 10号・13号槨棺蓋(西から)
10. 12号槨棺蓋(西から)
11. 11号槨棺蓋(南から)



1. 4号裴棺上蓋 2. 7号裴棺上蓋 3. 8号裴棺上蓋 4. 1号裴棺上蓋
5. 1号裴棺下蓋 6. 4号裴棺下蓋 7. 7号裴棺下蓋 8. 8号裴棺下蓋
9. 11号裴棺上蓋 10. 11号裴棺下蓋

10



A・B・C・D地点（京都帝国大学発掘調査） E・F地点（九州大学・福岡県教育委員会発掘調査）
G地点（福岡県教育委員会発掘調査）

第7図 道跡周辺地形図(昭和4年9月)（筑前明治史歴道路の研究
京都大学研究報告第11号より）

須玖・岡本遺跡
福岡県文化財調査報告書 第55集

昭和55年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲6-29
印刷 赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門丁目8番34号